

日本と韓国の大学におけるグローバル人材育成に関する一考察

ー八戸学院大学と仁済大学の調査研究を中心としてー

丹羽 浩正 石橋 修 崔 桓碩

はじめに

昨年度、学校法人光星学院イノベーションプログラム（基金）研究等補助金において採択された本研究は今年2年目を迎えた。日本と韓国の大学によるグローバル人材育成における今年度研究の主目的は、本学の学生4名（男子学生2名、女子学生2名）が韓国の仁済大学（金海市の）を実際に訪問し、仁済大学の通常の授業及びフィールドワークなどの実体験を通して、グローバル人材とは何か、そのあり方について体感・体得することにある。韓国入国後から日を追うごとに学生たちの表情には充実感が表れていた。韓国での4日間の研修を終え帰国した際、空港での学生たちの態度に成長を感じ、また彼らの会話の中に充実感が伝わってきた感動は今も忘れることのできない思い出として残っている。

この2年間に亘る研究内容については、1年目に実施したアンケート分析の報告も含めて、数か月以内に小冊子にまとめる予定である。

1. 東アジア諸国における国際交流の可能性

グローバル人材の育成が数年前から強く唱えられているが、その対象国はかつての欧米からアジアへとシフトしつつある。21世紀はアジアが世界市場の中心的役割を得ることにより、世界経済を牽引する時代になるとの予測がなされている。特に東アジアは、著しい経済成長の伸長が想定されている。世界の表舞台に登壇してきた東アジアについて、東京大学東洋文化研究所田中明彦教授は次のように分析している。⁽¹⁾

第一は、東アジアの国々とは日本、中国、台湾、香港、シンガポール、韓国、北朝鮮、などの国々を含むのが一般的だが、北朝鮮を除き、21世紀世界システムの経済成長をけん引してきた。また、急成長している東南アジア諸国も含めると、世界経済のかじ取りは東アジア及び東南アジアが握っている。第二に、統治能力の高い国家を有していること。第三に、市場経済が発達しつつある一方で、政治体制で異なる国々が混在している。第四に、過去30年以上国家間戦争を経験していないことである。際立った脆弱国が存在しないことは非常にこの地域の経済的繁栄と平和構築の枠組みを強固にしつつある。このような特徴から21世紀のグローバル人材育成における交流国として、東アジア及び東南アジア諸国を中核国に想定することは重要な判断といえる。

2. 地方大学におけるグローバル人材育成

大学と地方創生に関して、わが国の人口が減少していくなかで、大都市人口集中化の勢いを抑え、地方人口の中でも特に若年層の地方定着への方策が強化されている。このことから有能な

“若者人材”の供給源である高等機関としての大学の役割は大きい。このような社会情勢を踏まえて、これからの大学の在り方について、義本博司大臣官房審議官は大学を6つの社会的機能に分類する。①若者を地域に留め置く機能－地域に大学が存在することにより、若者を地域にある程度留め置くことができる。②良質な雇用を創出する機能－知的事業体である大学に教員、職員、技術者、医療従事者など雇用により、高学歴者の働く場になる。③経済主体としての機能－大学の教育研究活動や教職員・学による地域に大きな経済効果をもたらす。④研究成果を地域に還元する機能－大学の研究成果や技術シーズなどを活用による新商品開発などが行われる。また地方自治体との連携による地域課題の解決に向けた取り組みが行われる。⑤教育機関として地域人材を育成する機能－地域産業等の担い手の育成、防災、まちづくり、農業の6次産業化など地域課題に対応した人材の育成。⑥地域の様々な主体のハブとなる機能－地域自治体、経済団体、NPOなどを糾合するプラットフォームの機能を果たしている。⁽²⁾

地方都市のあるべき姿としての位置づけが明確になることによって、その目的を果たすための政策が産学官でそれぞれの立場専門性を活かして稼働することにより、魅力ある大学・産業・街づくりが相乗効果を発揮することになる。東京・名古屋・大阪の三大大都市は日本の核になることは当然であるが、地方都市とどのように連携していくかが重要である。WLB（ワーク・ライフ・バランス）や保育所の待機児童問題、過度の人口集中による災害への抵抗力不足等々の緊急重要課題は大都市特有の大問題として常に取り上げられているが、地方都市はWLBや保育所問題等々では大都市ほどの議論にはなっていない。地方都市は経済力では大都市に劣るが、大都市にはない大きな強み・魅力がある。地方都市の魅力は物価水準が低く、生活の基本である衣食住が安定していることにある。そしてコミュニティが存在している。

大都市災害等発生による大都市機能不全時の補完機能として、地方都市の役割は大きい。それは、行政や企業の機能補完だけでなく一番重要な一般市民の“生きる”という人間の基礎欲求を保全するためのバックアップ機能として地方都市には大きな役割がある。また平常時においても大都市に比べストレスの少ない諸環境に恵まれていること、そのような環境でリフレッシュし再生する力を活かすなどの人材力を育てる場としても地方大学の役割がある。

国際交流は文化交流にその原点がある。その土地で育まれた文化はその土地の生活文化でありその土地で育まれた人間の価値観に繋がる。他文化への理解を図ることが異文化交流であり、相互理解の促進に直結する。地方の大学にはその地方が育んだ文化の中で教育を実践しているのであり、地方大学の国際交流のあり方として今回の日本と韓国の学生同士のフィールドワークの効果を検証したい。文化の体験・交流は距離に即効性があり強固な関係にもなる。重要なことは表面的な参加意識ではなく言葉よりも気持ちを伝えたい、知りたいという“強い思い”こそが国際交流の原点ということにある。その視点から地方大学ならではの“直接会って話をする体話”という行動ができる環境をつくること。そして継続することが肝要である。交流は継続なしには始まらない。海外の人と話したい、海外の言葉を話してみたいという動機づけ（モチベーション）を起こすことで、地方大学が国際交流を行うことは可能である。さらに積極的に進めることにより、地域振興・地域の活性化に寄与することとなり、グローバル人材を育成する環境を整えることができる。

（丹羽 浩正）

参考・引用文献

- (1) 田中明彦「世界システムと日本」『書斎の窓』No.663、PP 2－3、有斐閣、2016年1月1日。
東京大学東洋文化研究所教授
- (2) 義本博司『IDE現代の高等教育 NO.571』「大学と地方再生」、PP18－25、IDE大学協会、2015年6月1日。

3. 大学における教育の質保障とグローバル人材育成

今日、ICT革命はグローバル経済を現出させ、グローバルなネットワーク構築は人、カネ、モノ、情報のボーダレス化を加速させている。一般的には、世界共通言語としての英語を運用する、異文化理解に基づく意思疎通能力や地球規模の視点から国家という枠をも超える存在がイメージされる。このような人物像に立脚するなら、大学の取り組みとしては必然的に国際的な大学の教育コンソーシアム形成やMOOCsなどのデジタル高等教育のグローバルネットワーク、教育の質の国際標準化、あるいは「学生渡り鳥」にたとえられる国家間の学生流動化の特徴が想起されよう。同時に21世紀の不可逆的なグローバル化の進行は、一方では世界の「同質化」とその脆弱性を補完する「多様性」をも同時に要請するという教育構造がクローズアップされてくる。

必然的に大学教育質保障のための国際的な枠組みづくりも強調され、高等教育質保障機関の国際ネットワークの地域ネット「アジア太平洋質保障ネットワーク」(APQN)に加盟する大学間の連携も強化されている。現に2009年開催の日中韓サミットでも大学間交流の促進に関連し、前提として教育質保障の基盤整備の合意がなされた。同時に、東アジア圏における大学のグローバルゼーションに由来する質保障の枠組み構築や評価効力の相互認証が、クローズアップされてきた。

今日では海外の大学との教育連携の中で、ジョイントデグリーやダブルデグリーのプログラムは例外的なことではなく、アウトカム評価を前提とした教育の質保障としてのアクレディテーション展開も一般化しつつある。欧州のエラスムス計画、ボローニャ・プロセス、EU諸国のアウトカム提示をベースに教育課程－学位－職業資格を考慮した動きなどが代表的な動きである。

さて、このような国際的なうねりの中で国際戦略としての「グローバル人材育成」は①優秀な留学生の獲得と高度人材としての社会輩出、②海外学習体験の帰結としてのグローバル人材育成、等が想定される。特に②との関わりでは、政策課題としてのグローバル人材育成から市民社会を形成するグローバルな主体形成に至る多様なニーズが伏在する。地方大学における国際化への対応やグローバル人材育成の意味もまさに、「ふわふわ国際志向性」から「リアル国際志向性」へのソフトランディングプログラム構築と大いに関連している。国際化に取り組む大学は、留学生と日本人学生との交流機会や短期研修留学も含めた国際化推進への創意工夫の継続が求められている。

4. 本学における仁済大学との交流と韓国のグローバル人材育成関連動向

本学では平成26年、韓国金海市において、仁済大学との学術交流協定を締結している。仁済大

学は世界各国の大学、研究機関と協定締結により、国際感覚涵養のグローバル教育展開を実施している。本学としても共同研究や交換留学、語学研修など国際社会に通用するプログラム開発が求められている。この2年間に2回の訪問交流機会を持つことで両大学の交流に関する情報交換が可能となった。その意味では、2010年の中央教育審議会答申と重なるが、第一段階として東アジアを見据えたグローバル人材育成の考え方とも重なり、教育の質の保障を伴う大学間交流推進の必要性に立脚するものでもある。今回の仁済大学での交流・聞き取り対象者は、副総長の朴元旭（パク・ウォンウク）教授、国際交流所長の韓鎔在（ハン・ヨンゼ）教授、日語日文学科の李進厚（リ・ジンフ）教授、全成燁（ジョン・ソンヨップ）教授、林憲燦（イム・ホンチャン）教授、高柳有希教授、及び日本の地方大学を中心とした留学生であった。

ここで韓国の大学を取り巻く状況をみるなら、高等教育の進学率は70%を越えるものの少子化の影響を受け、統廃合の進行をみながらも大学数や大学院数は微増にある。留学生との関連においては、付属語学堂（韓国語の学校）設置、短期語学研修プログラム等、多様な外国大学生対象プログラムの提供等がみられる。

また、外国人留学生比率は、OECD諸国と比較すると25%程度であり、出身国としては、中国が60%以上、日本が5%弱、モンゴルが日本と比較し若干低い数値のデータとなっている。学位課程の経費支弁別では、私費留学生在が60%を越え、国費留学生在が2%であることを考慮するなら、日本同様、中国人留学生、文系、学部課程、私費留学生在、といった共通点がある。

特に、2001年の「外国人留学生誘致総合方策」以降、留学生受入れに重点を置いた政策転換がなされ、留学生への環境改善がクローズアップされることになる。具体的には、宿舍の拡充・整備、アルバイト等の就労活動制限緩和、入管と大学との連携による留学生の在留・在籍管理の改善等である。

さらに、2004年に発表されたStudy Korea Projectでは留学生5万人増が目標となり、その後、2008年には2012年までに留学生を10万にする政策が展開された。具体化のための骨子としては、外国政府サポート留学生や韓国政府招聘留学生数の増加を図り、韓国語研修プログラム開設支援費の5倍増、諸大学共同利用の宿舍建設推進、卒業後の韓国内での就職支援強化、有効な取組み事例へのサポート体制強化、等であった。

ちなみに、「外国人留学生の支援・管理改善方策」（2009年）の重点分野や推進事項では、留学生リクルーティングの充実（Global Korea Scholarship事業と連動した多様な国の大学との交換留学、ダブルデグリー制度の推進等）、留学生入学選考の体系化、留学生に対する修学上の利便性向上（専門担当職員の配置等）、留学生に関する政策上の基盤強化（留学生に関する実態調査や分析と公表、入国から出国までのすべての場面におけるオンライン・ベースでの支援等）が挙げられよう。

さて、紙幅の関係もあり今回の訪問交流の詳細については、後の章での記載を参照いただくとして、2回にわたる仁済大学への訪問交流の中で確認された課題や留意点について整理するなかで、例示として具体的な3点のみ挙げてみたい。

- ① 窓口となる担当部署との恒常的情報交換の必要性。（担当職員の異動の可能性も含めて）
- ② 語学研修や1年間・2年間留学のスムーズな手続きの確保。（既に留学生を送り出している日本の他大学の仕組みの準用）
- ③ 日本からの留学生の満足度の高さ。（留学生を受け入れる際の参考となる）

特に、③に関しては、留学生寮等のハード面や日本語学科学生・教員のサポート面が関与する

点であり、意欲の高い学生の資質にも関係する可能性が高い側面がある。このように、留学生派遣や受入れの体制整備、教学面の質保障に関連する内容等と関連する多岐にわたる要検討事項が山積している。本学において今後予想される留学生派遣や受入れに関連し、課題となる点であろう。

5. 地方大学と今後のグローバル教育人材育成への取り組みの必要性

地方大学においても福井大学のように、国際地域学部を設置がされる昨今である。グローバル志向はニーズとして高い実情がある。

本学も例外ではないが、国際志向性に関しての日本人学生が内向き志向が指摘される。最近の韓国調査では日本人学生以上に国際志向が強いという結果が出ている。留学積極群は日本では約60%、韓国では約90%、留学消極群が日本で25%、韓国では3%である。OECDの「Education at a Glance」等を見ても、近年の日本人留学生の推移は減少を続けており、文部科学省が推進する「G30プラス」の推進においても各大学の「やる気」や数値目標を踏まえた目標設定が、大学の多様性を背景としながらも、事業展開の特徴になっていることである。最終的には、「グローバル人材」をどう測定するのかといった課題の評価軸の考察の必要性もあり、欧米に見られるような高等教育を対象としたデータ蓄積の学習成果の分析も要請されよう（1998からの高等教育とキャリア研究を目的としたCHEERSプロジェクトなど）。また、留学経験者を対象とした追跡調査や海外学習体験と資質開発の相関関係なども今後の課題である。

さらに、グローバル社会を生きる能力の獲得の前提としての21世紀型スキルという点では、アメリカを例にとれば、コア・サブジェクトに加えて、21世紀が直面している現代的課題（グローバル化、環境問題、人口移動等）に関連する知識の学習にも留意されている。つまり、「21世紀型スキルパートナーシップ」の開発に基づいた、21世紀型スキル獲得の教育の実施が試みられているが、それが教育改革の柱に位置づいている。もちろん、OECDのキー・コンピテンシーもグローバル人材が持つべき知識、資質、能力についてアメリカの流れと重複する要素が多い。

世界のそれぞれの国は、様々な歴史的、教育文化や社会構造の背景が異なる点において、それぞれの要素の重要性には違いが生ずることになる。我が国の場合は、知識中心の教育の展開の帰結として、グローバル人材に求められる知識については十分にクリアーされたとしても、知識の使い方や実践への転移への配慮不足が指摘されている。つまり、知識を活用しての創出能力、知識を反映させた問題解決能力、高度思考能力などの開発が求められているのである。

日本型グローバル人材に必要な知識、能力、資質を具体的に例示するなら、基本的教科はもとより①高度の思考能力、②意思決定能力と連動する問題解決能力、③発信力を含むコミュニケーション能力、④文化的コードスイッチ能力、⑤生涯学習能力、⑥柔軟性や多様性、等が列挙されよう。

ともすれば知識が重視されがちなアジアの教育と、実践的能力にウエイトを置いたアメリカやヨーロッパ諸国の教育間の調和的合体が望まれよう。その意味では、本学における地域や自治体等との多様な連携同様に、仁済大学との多様な連携による教育実施の展開は本学教育の質的転換と高度化を図る意味でも意義があろう。この連携による教育の有効性確保には、交流大学間の目的の共有やプロセス、使用教材、学習効果の検証等の綿密な取り組みが必要である。これは、質保障枠組みシステム構築の考察に深く関与する作業として不可欠なものである。

最後に、地方大学の国際化が大学の将来像とリンクしながらも、その戦略性が問われているが、2000年に大分県と別府市等の地域の支援を受け船出した立命館アジア太平洋大学の2代目学長モンテ・カセムが強調した点に言及し、国際化を推進する日々の業務の糧としたい。それは、大学国際化を具現化するコアになるものは、開かれた大学に必要な、教員と職員が対等に議論しながら協働し業務遂行するという、目標共有のプロセスであろう。

(石橋 修)

参考文献

- 西山教行編『グローバル人材再考』くろしお出版、2014年。
鈴木典比古『グローバル教育財移動理論』文眞堂、2014。
横田雅弘他編『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社、2013年。
早田幸政他編『大学のグローバル化と内部質保障』晃洋書房、2012年。

6. 仁済大学のグローバル人材育成プログラム

6.1 仁済大学の概要

本学と2014年6月2日に学術交流協定を締結した韓国の仁済大学は、1979年に仁済医科大学として開校され、1983年9月に仁済大学に校名を変更し、1988年11月に総合大学の仁済大学校に昇格した¹。仁済大学の前身は1932年に開設された病院ということもあり、韓国でも医科大学として有名である。学部の構成も医科大学（医学科、医学部、看護学科）が中心であり、そのほかにも医生命工学大学（医用工学科、臨床病理学科など）、人文社会科学大学（韓国学部、中国学部、日語日文学科など）、言論政治学部、国際経営学部、経営学部、工科大学、デザイン大学、独立学科などが設置されている。

仁済大学の構成員は、2015年4月基準で、大学生13,978人、大学院生1,468人、教員994人、職員262人がそれぞれ在学および在職している。また、世界23カ国の107大学と交流協定を締結しており、20カ国以上から約200人の留学生を受け入れている。

6.2 グローバル人材育成プログラム

近年では、「One INJE, Global INJE」というスローガンの基で、在学生による海外交換留学や協定締結校による外国人留学生の受け入れを積極的に推進している。

2012年3月1日から2013年2月29日までは、国から大学教育力量強化事業の一環として「人性と素養を備えた創意的グローバル専門人力養成事業」に選定され、33億6400万ウォン（約3億1680万円）の支援金を獲得した。この事業の目的は、人性と素養を備えた創意的グローバル専門人力を養成することで、学生の学習意欲の向上および均等な教育機会の提供、学生の産学連携を通じた就職競争力の向上、人性および基礎力量の強化、グローバル力量の強化等である。

具体的な事業概要としては、以下の表のようである。

表1 仁済大学の教育力量強化事業

人性および基礎力量強化	・学生主導型創意研究プログラム ・基礎科学教育モジュール開発プログラム ・作文クリニック ・サイバー講座コンテンツ開発 ・伝統文化教育プログラム ・人文人性および人性培いプログラム ・学習チューターリングプログラム
グローバル力量の強化	・TOEIC成績向上支援事業 ・海外研修支援プログラム ・海外ボランティア活動プログラム ・グローバルチャレンジャープログラム
産学連携を通じた競争力の強化	・インターンシップ支援プログラム ・就職関連プログラム ・産学協力関連プログラム ・現場密着産学研究プログラム ・現場中心型専門人力養成事業
奨学金の支給	・成績向上奨学金 ・成績優秀奨学金 ・障害学生支援奨学金 ・低所得層インターンシップ奨学金

(出所) 仁済大学ホームページより筆者作成

6.3 国際交流の状況

仁済大学校は、1994年にアメリカのメリーランド大学との交流協定締結を始めとして、世界の21カ国、107カ所の大学および研究機関と学術交流を締結し、共同研究、交換留学、語学・専攻研修など、多様な学術交流制度を設け、国際感覚を養うグローバル教育を行うとともに、学問研究の道を開いている。

表2 仁済大学の交流協定状況

国家名	個数	国家名	個数
マレーシア	3	フィリピン	10
モンゴル	10	台湾	2
アメリカ	20	オーストラリア	2
ベトナム	1	キルギスタン	1
インド	1	ルマニア	1
インドネシア	1	イギリス	2
タイ	5	ドイツ	1
日本	19	スウェーデン	3
中国	21	オランダ	1
イスラエル	1	ケニヤ	1
タンザニア	1	合計	107

(注) 2013年9月基準のデータに本学を追加

(出所) 仁済大学ホームページより筆者作成

6.4 交換留学プログラム

仁済大学は海外の大学および研究所を含む専門機関で学生が積極的に専門教育および研究活動できるように様々な研修プログラムを行っている。また、海外の外国人学生を幅広く受け入れ、支援している。その他にも、海外の専門機関との学術交流を通じて、共同研究にも力を入れており、交換教授の派遣、国際学会への参加支援制度を備え、教員の海外学術研究活動を支援している。

学生による交換研修プログラムは、交流締結大学への留学と仁済大学への留学に分けることができ、それぞれに関する状況は以下のようなものである。

(1) 交流協定大学への留学

仁済大学の場合、学生の外国語能力の向上および国際文化の理解を増進させるために様々な海外研修プログラムを実施している。その種類には、留学、交換留学、語学研修、専攻研修があり、毎年、多くの学生が海外研修プログラムに参加している²。

表3 学生海外派遣現状

区分	留学	交換留学	語学研修	専攻研修	合計
2004年	16	20	59	59	154
2005年	5	52	53	61	171
2006年	1	71	115	126	313
2012年2学期	33	68	26	44	171
2013年1学期	23	93	63	98	277

(出所) 仁済大学ホームページより筆者作成

(2) 仁済大学への留学

1) 留学生の状況

仁済大学で学習および研究を行っている外国人留学生は、2013年9月基準で、学部生40人、交換学生45人、大学院生90人、語学研修生23人、総198人である。

2) プログラムの紹介

仁済大学は世界の21カ国、107カ所の大学および研究機関と学術交流を締結しており、各機関との交換留学プログラム協約を通じて、毎年20人余りの学生が仁済大学で言語および専門科目を学習および研究している。仁済大学で単位を履修する外国人交換留学生のための教育課程は、次の通りである。

表4 韓国語プログラム

教科目名	単位	授業時間	媒介言語
Basic Korean I, II	3	5	韓国語
Basic Korean Conversation I,II	3	3	韓国語
Intermediate Korean I, II	3	5	韓国語
Intermediate Conversation I,II	3	3	韓国語
Introduction to Korean Society & Culture	3	3	英語
Contemporary Popular Culture in Korea	3	3	英語
Korean Traditional Culture	3	3	英語
Korean History in East Asia Contexts	3	3	英語
Physical Education of Korea	3	3	英語

(出所) 仁済大学ホームページ

その他に、2週間または10週間の韓国語と文化プログラムがあり、2週間のプログラムは毎年2月と8月に実施しており、10週間のプログラムは毎年1回実施している。たとえば、2週間のプログラムの場合、プログラムの構成は、1回90分の韓国語授業を15回行い、韓服試着、舞踊芸術（テクォンド）、韓国料理、映画鑑賞などの韓国文化体験を行うこととなっている。その他にプログラムへの参加者には仁済大学の在学生在がチューターとして付くため、仁済大学の学生との交流もできる。

3) 施設状況

仁済大学は、キャンパスの中で5つの寮を備え、在学生のみならず海外からの留学生に快適な生活環境を提供している。特に、寮で生活する人は、遠距離居住者を優先に選抜し、現在2,184人の学生が生活している。寮は、読書室や閲覧室、インターネットやレポート作成のできるコンピューター室、語学実習室など充実した学習空間の他、映画鑑賞室、トレーニング室、卓球場、休憩室など、生活を楽しむ空間も整えられている。また、0時限（8:00～8:50）には、寮の学生を対象にした視聴覚英語・生活英語、生活日本語などの科目を開講し、単位として認定する特別教育プログラムも運営している。キャンパスの中の「英語村」とも呼ばれる「Inje English Town」では、英語の成績が優秀な学生170人程度が選ばれ、30名のネイティブスピーカーとともに全て英語で寮生活を行っている。ここで生活することによって、海外への留学前の学生は英語や現地適応の事前訓練に、帰国後の学生は英語力の維持に努めることができる。

7. 八戸学院大学学生と仁済大学学生との交流について

本学と韓国の金海（キメ）市内に位置している仁済大学は2014年6月2日に学術交流協定を締結した。その後、両大学の学術交流を深めると同時に、学生同士の交流を積極的に進め、本学学生のグローバル人材を育成することを目的として、2015年11月29日(日)から12月4日(金)までの6日間、引率教員3名と学生4名（ビジネス学部2名、人間健康学部2名）で、仁済大学を訪問した。本章では、本学学生の体験記を基に、仁済大学生との交流の概要を次に記する。

7.1 仁済大学日本人交換留学生との交流（本学学生体験記概要）

我々（学生4名）は、仁済大学に現在留学をしている日本人の学生と交流をした。仁済大学に現在留学している日本人は4人で年齢は我々と同じくらいであった。

日本全国から来ているため、出身地などは様々で、遠いところでは沖縄から留学している人もいた。その中の1人は八戸出身だったので、我々とはよく八戸の話をした。自分が住んでいた八戸の学生が来るということで何日も前から楽しみにしていたと言ってくれたので嬉しかった。

初めは緊張したが、その後は緊張することなく、アットホームな雰囲気です話を聞くことができた。そして、いざ交流の時間になると固い雰囲気が初めはあったもののそれもすぐになくなった。やはり、留学生の方は気さくな人ばかりでジョークも交えながら分かりやすく、我々の目線になって話してくれた。

住んでいるのは仁済大学の寮で近くにグローバルタウンというところがあり、だいたい70人くらいのさまざまな国籍の人々が住んでいる。1人につき1人、仁済大学学生のパディ（いわゆるチューター）が付き、韓国語を教えてくれるなど、日常生活のサポートをしてくれる。

仁済大学の学生は日本に興味があるという人が多く、積極的に話しかけてくれた。韓国の高校では日本語と中国語が必修科目となっているため、日本語も少しは通じすぐ助かっているという。学校生活はとても楽しいらしく、その内容からも充実した学校生活をおくっていることがわかった。

勉強面では、仁済大学は1コマ50分で朝の8:00から夕方17:00まで講義を行い、昼休みはないという。昼食は講義のない空いている時間ですませるそうである。そして、留学生が学んでいる語学にはどのくらい出来るのかによっていくつかのクラスがあり、また学年によっては学んでいく内容が異なり、クラスには初級から高級まである。初級クラスは多国籍で、中国、マレーシア、イスラエル、オランダなどからの留学生がおり、中国人が最も多い。授業スタイルは自由で、留学生向けには英語や中国語で説明してくれるという。4人の留学生はそれぞれ初、中、高級に分かれて属しており、高級クラスでは韓国人でも難しいと思うような韓国語を学んでいるとのことだった。

勉強以外の活動では仁済大学はサークル活動がとても盛んに行われている。例えば、日本語学科のサークルでは日本語のみを使って新聞を発行したり、日本の歌を日本語で歌ったり、日本の劇を日本語で演じたりしている。また、仁済大学の施設や運動場には十分なものがそろっており、サークル活動を行うには不便な点がほとんどないという。

サークル以外にも学園祭がある。学園祭はやはり学生生活の中でも一番楽しい行事だという。内容としては、学園祭の開催はすべて学生が行うためやりたいことに挑戦できる。また、アーティストを呼びステージをサッカー場に設立し野外ライブを行っている。その他にも催し物があり、お酒をみんなで飲みながら夕方5:00から深夜2:00まで続くという。こういった行事やサークルなどの充実が勉強を学ぶための原動力に繋がっているのではないかと感じた。

最後になぜ韓国へ留学したのか尋ねると、先生になるため、通訳をする仕事につきたいなど明確で具体的な考えを持ってきていることを聞き、我々には刺激になった。我々も何か相手の刺激になれるような存在になっていかなくてはと感じた。

7.2 仁済大学学生との交流（本学学生体験記概要）

我々は日本に帰る前の日に仁済大学の韓国人の学生と夕方ごろから交流した。初めに自己紹介

をした際、互いに慣れない発音の名前に何度確認し合ったのを覚えている。しかし、韓国の学生は気さくでどんどん話しかけてくれた。おかげですぐに打ち解け合うことができた。男性陣の名前はミンテク (민텍) とボンジン (범진)、女性陣はダイン (다인) とヒョビン (효빈) だと教えてくれた。自己紹介もそこそこに、先生方と別れ、ここからは日韓の学生同士の交流である。ミンテクがわざわざ日本語の観光パンフレットを準備してくれていたの、それを参考に話し合いの結果、チャガルチ駅の1つ前の駅である「南浦洞 (ナンポドン)」という場所に行くことになった。移動中、会ったばかりなのに、既に少し打ち解けた雰囲気があって、これは最終日の解放感であったり、帰国する名残惜しさであったり、初対面同士の緊張感や高揚感が絶妙にマッチしたのだと思う。

韓国の学生と一緒に地下鉄に乗り、イルミネーションを見るため、チャガルチ市場の方に向かった。地下鉄に乗っている間は、日本で今流行しているものについて話をした。南浦駅を出てすぐ街全体がイルミネーションで光っていた。日も沈み夜になっていて、海が近いので海風がすごく、みんなのことを知ると暖まる目的でカフェに一旦入ることにした。4人は、学生行きつけのカフェへ連れて行ってくれた。驚いたのは、学生向けの店だからだろうか、各ボックス席が、頭の上からつま先まで隠れるくらいの大きなカーテン付きで、個室に近い状態にすることができることだ。照明も薄暗く、壁は落書きだらけで、客も放置気味なのでカップルに人気らしい。密室で集中して勉強する場所でもあるらしいのだが、日本に無い独特の脂っこい雰囲気があってとても気に入った。韓国ではゆず茶が人気らしくそこではゆず茶をみんなで頼んだ。また驚いたのは、温かい飲み物を平べったいストローで飲むというものである。日本ではあまり温かい飲み物をストローで飲むことがなかったので、勢いよく吸ってしまい、火傷をしたのを覚えている。しかしながら、身近な体験ができてよかったと思う。カフェではお互いのことについて話した。どうして今回来たのか、なんで日本語を勉強しているのか、お互いの国での流行など様々な話をした。はじめは緊張したが、話をしているうちに緊張などはなくなった。何より、みんなで席を交換しながら楽しく打ち解け合うことができてきました。日本のドラマ、韓国のドラマをお互いに見ていたの、その話題や、学生のひとりが日本に留学していたときの写真を見せてもらった。

カフェの次は屋台で軽く食事をとりに行った。まずはおでんを食べた。おでんは辛いものと辛くないものの二種類あり、おでんのつゆは飲み放題だった。おでんの具は日本に比べて少なかったが、餅が入っていてとても美味しかった。日本ではみんなで屋台に行くのは、夏のお祭りくらいだったので寒い中食べた「トッポキ (떡볶이)」の味はとても美味しかったと同時にいい文化だなと感じた。別の屋台で焼き鳥も食べた。ももで、味は日本と同じだった。3,000ウォンだったが、その分とても大きかった。「シアホット (썬앗호떡)」という、揚げパンの中にペースト状の砂糖と色々な種が入っているようなものも食べた。屋台には、行列ができていた。同じ屋台が色々な場所にたくさんあり、日本語の看板を立てている屋台もあった。日本語表記には所々間違いがあって面白かった。シアホットは屋台によって味が違うようで、学生の一人が、自分の家の近くにある屋台のものはもっと美味しいと話していた。3色でできているカラフルな綿あめの屋台もあった。

そのあとはメインのイルミネーションを見に行った。みんなでたくさん写真を撮り、このころになるともう昔からの友達のようになっていた。そして、ソミョンに戻り韓国での最後の夕食を食べた。お酒も入り、お互い何を目指しているのかなど深い話もできとても楽しかった。学生のうちの一人は、日本のアニメを見て日本語を覚えたと言っていた。勉強しているうちに日本語

に対して、日本に対して興味を持つようになったからだと言っていた。学生たちは、我々との交流が決まってから、我々をどんなところに案内するか、どうしたら楽しんでもくれるか、喜んでくれるのかと計画をたてていたと言ってくれたのでそれを聞いただけでも嬉しかった。また、日本語の授業の話になり、授業で使ったプリントを見せてもらったが、日本語で作文（自己PRや思い出について）を書いてそれを添削するという内容だった。二人のものを見たが、二人とも漢字までよく書けていた。ついつい時間を忘れてしまうほどで、終電を逃してでも最後まで送り届けてくれた。

半日と短い時間での交流であったが、最後には友達になるのに国なんか関係ないのだということを感じさせられた。別れ際に涙を流す人までいた。今でも連絡をとっているのだからまた機会があったら会いたいと思う。今回のこの交流が互いにいい刺激になり、物事を見る視野をどんどん広げていけたらいいと思った。そして、それが自分の成長、また周りの成長、そして、大学の成長にも繋がっていくのではないかと考えさせられた。今回の交流が我々の次の世代だったり、次に韓国に研修に行く人たちにつながればいいと思う。最終日にして今回韓国を訪れた中で、一番有意義な時間を過ごせたと思う。

7.3 仁済大学日本語日文学科の授業参観（本学学生体験記概要）

(1) 「基礎日本語会話」授業の参観

仁済大学を訪問し、日本語学科の学生の講義を参観した。我々はその講義のうち2コマを参観した。まず、最初は日本人の高柳ゆき先生が教える「基礎日本語会話」の授業であった。1人ずつ名前を呼んで出席を取ったあと、簡単な自己紹介を求められ、我々4人は教室の前に横一列に並ばされた。韓国語での自己紹介は、事前に少し練習してはいたものの、大勢の学生たちのキラキラした目に囲まれたことで、一瞬にしてど忘れしてしまった。結果事前に書いておいたメモを見て、「オヌルン ナルシガ ジョンネヨ」（今日はいい天気ですね）と言ったことに、予想以上の反応が返ってきたことが嬉しくて、その後、韓国の学生に対しても積極的になれたように思う。

まず、講義が始まると先生が一人一人名前を呼んで出席をとっていた。ほとんどの生徒が出席しているため、してない生徒が目立った。そして、教室を見渡すと前の方の席には空気がなくどんどん前のほうから埋まっていた。発表の際は基本的に先生が生徒を指名して回答するという流れになっている。あてられた生徒は正確に答えた。先生が指名していない場面でも発言が多く講義全体雰囲気良く聞いていて楽しかった。

講義の内容としては「くれる」、「あげる」、「もらう」というものであった。基本の解説後には、「あげた→あげました」への変化や、現在形から過去形への変化、て形（座る→座って、転ぶ→転んで、休む→休んで）、ます形+たい（学校を休む→休みたい）など既習範囲の復習もしていた。正直この内容はとても難しいと思った。

授業後半に配られたプリントは、「あなたは友達の誕生日に何をしてあげましたか」、「あなたは誕生日に友達から何をしてもらいましたか」という質問に対し、自分で日本語の文章を作るという内容だった。その際に、先生から、学生の答案を見て教えてあげてほしいと言われ、答案を見て回った。質問をされたことは、

- ・ヘアピンのカタカナでの書き方
- ・リップはリップのままでいいのか

・「歌を歌ってもらう」の表現（歌をまでしか書いていなかったの、歌うという動詞が分からなかったのだと思う）

の3つだった。カタカナの、濁音と半濁音を書くのが難しいようだった。

講義が進んでいく中で、生徒の問題を見て手伝うことになった。回っていると、分からない部分は積極的に聞いていて、私がみた生徒の中で問題に空欄のある生徒が一人もいなかった。このような部分からクラス全体がとても積極的なのだということが分かった。また、このような姿勢を作っているのが先生でもあるのだと感じた。講義の流れが止まることなくテンポがよく聞いていて、前のめりの姿勢づくりに繋がっていると思った。講義内に過去に学んだ内容の復習も交えて行われており、基礎の形成がしっかりとしていた。このおかげもあり生徒たちの回答に空欄がないのだと思った。そして、実用性の高い単語や会話を学んでいるため身につけていくと日本語がうまくなると感じた。授業内容のレベルの高さには驚いた。「誕生日に何をもらいましたか？」と「誕生日に友達は何をしてくれましたか？」という、意味は似ていても違う言い回しの質問に、見た限り間違えている学生が1人もいなかった。どうやらテスト直前らしく、事前にしっかりと予習している学生が多いようだったが、八戸学院大学にはない、勉強に対する学生のハングリーさを強く感じ、大学生の試験前とはこういうものだと教わったような気がした。

(2) 「基礎日本語文型」授業の参観

先ほどの1コマ目と同様で、まずは出席の確認から始まり、前の席には空きがなかった。文法の講義はテスト前最後の講義ということもあり、コミュニケーションの講義とはまた、違う雰囲気だった。まずプリントを配り、例題に当てはまる最も適当な文型を、下の四角の中から選びなさいという、日本でもお馴染みのパターンだったのだが、例題のチョイスがとても面白い。例えば、「社長（ともあろうものが）昼間から外で遊んでいてはあの会社の未来は暗い」や、「結婚して20年、あなたの言う（とおりに）やってきたつもりです」（選択）など、とてもユニークで実践的だった。講義の時、先生から生徒が解いているのと同じ内容の問題を配られた。実際に解いてみると、日本人の我々ですら難しく間違える問題もあった。これも、コミュニケーションの講義と同じで問題のレベルが高く、基礎の部分がしっかりとしていた。読み書きができ、訳すこともできていたので驚いた。2コマ連続で、2コマ目は、「～にかけては」、「～に関しては」、「～については」などを教科書ベースで学んでいた。最近ではあまり使わなような固い言い回しも学んでいたの、レベルが高いと感じた。

その後、先生が我々に質問をする時間を設けて下さり、その際の我々の話を聞こうとしてくれている姿勢はとてもうれしかった。学生たちの前に立って、青森県について紹介することになり、15分ほどかけて地理や気候、お祭りなどを紹介した。さすが日本語を勉強しているクラスというだけあって、日本語で逆に青森県について質問される程で、日本語での説明も問題なかったのだが、かえって韓国語を全く話せない自分に不甲斐なさを感じ、次に韓国に来るときまでには、日常会話程度の韓国語は是非習得したいと思った。また、学生たちの質問はたくさんあり、分からなければすぐに自分たちで調べ、あっているかどうか確かめてくれた。こういった積極性はすぐにでも真似していかなければならないと思った。

7.4 仁済大学との交流についての感想（本学学生体験記概要）

文化の違いに戸惑うこともあったが、外国の大学に行き、外国で同年代の学生と交流するという、とても貴重な体験をすることができた。出発前は外国や異文化交流に全く興味はなかったが、今回の仁済大学訪問を通して、とても興味が湧いてきた。何よりも、離れたところに友人ができたことが嬉しかった。日本に帰ってきてからも、SNSを通じてやりとりをしている。今は日本語で行っているが、私も韓国語を勉強し始めたので、いつかは韓国語でやりとりできればいいと思っている。

食べ物は全て美味しかったが、やはり辛いものが多かった。仁済大学の学生の1人が、辛いものが苦手と言っているのを聞いて、韓国人でも辛い物が苦手な人がいるのだと驚いた。ただ、私は苦手のレベルが全然違うので、日本人で考えたら辛いものが得意な部類に入るのではと思った。育つ環境は重要だということを再認識した。

今後も仁済大学と八戸学院大学との交流が続けば良いと思っているが、相手が日語日文学科であるにしても、こちら側も韓国語を勉強する必要があると感じた。海外で現地の人と日本語で話したことは初めてで、とても嬉しく、それは誰でも同じだと思うので、今後も交流するにあたり、韓国語を話せる学生がいればもっと深い交流に繋がると考える。

今回のこの経験を生かして、国際交流に目を向け、異国の文化や言語を学び、グローバル社会で活躍できるような人を目指したい。将来は中学校教師を目指していたが、海外で日本語を教える道も考えたい。

仁済大学の学生は、全員とても熱心に日本語を学んでいた。ほとんどの学生が積極的であり、その積極性を、八戸学院大学の学生は見習うべきだと思った。

今でも、仁済大学で交流した学生とはお互いのことを報告したりなど、日本に帰ってきてからの交流は続いている。今では大切な友達だ。今度は我々の八戸学位大学に来たいと言ってくれたので、来る機会があったら今回仁済大学の学生たちが我々にしてくれたように、私も精一杯おもてなしをしたいと思う。

今回で私が得たものは大きかった。このような体験をすることはなかなかないと思うので仁済大学に行くことができて良かった。このことは一生忘れないだろう。

（崔 桓碩）

参考文献

仁済大学ホームページ <http://www.inje.ac.kr/japanese/>

¹ 韓国では、「大学」は2年制の短期大学を、「大学校」は4年制の大学を指す。また、総合大学とは、3つ以上の単科学と大学院から構成される大学を指す。

² 韓国では、「留学」は海外の大学で学位を取得することを意味し、「交換留学」は交換学生として交流協定を締結している大学へ1年以下の期間で行く場合を意味する。この交換留学の場合、韓国の所属大学で学位を取得する。

おわりに

スペインIESEビジネススクールのパンカジ・ゲマワット教授は、グローバル化は一般的に思われているように簡単には進まないとの仮説を主張する。その根拠として、グローバルスタンダードについて次のように述べている。⁽³⁾

インターネットなどの技術革新により、国境という見えない壁はなくなり世界はフラット化するのではないかと言われていたが、現実はまだ多様のままである。このようにグローバル化は行き過ぎて語られることが多い。SNSの進展により世界中の人とつながることができたが、SNSによる交流の85%以上は国内の人たちであり、増えたのは国外ではなく国内の友人だったという分析がある。これは既存の人間関係や文化が持つ力が技術の進歩を上回っていることを表している。少なくともあと数十年は、この“セミ・グローバリゼーション”というべき現実を意識する必要がある。我々はグローバリゼーションの落と穴には注意しなければならない。

今回の研究は学生の体験重視を組み込んであり、やや冒険的なプログラムであったが、地方大学がグローバル人材育成の在り方を探るには有効的な方法の一つでありそれを選択した。成果として、経済産業省が唱える3つの社会人基礎力（一步踏み出す力、考え抜く力、集団で協働する力）を本学の学生たちが確実に使えることができたことである。高度な英語・韓国語能力を保有していなくとも、短期4日間という韓国での学生生活を体験学習することにより、従来より国際交流の足かせとなっていた語学力ありき前提や、知らない所には行きたがらない内向安定志向が強い傾向にある地方大学の一つである本学の学生に対して、ゴールに直結したプログラムを実践し、一定の成果を確認することができた。参加した学生たちの心に熾きた火をいかに灯しながら継続させていくか、魅力あるプログラムと制度づくりはこれからが本番である。

まず今後の予定として、この2年間の研究内容を加筆整理等を行い、数か月後には今回の研究成果を小冊子にまとめる計画である。

最後にこの2年間の研究を通して、仁済大学の献身的なサポートと真摯なる対応に際し、交流を進めることがどれほど大変なことであるかを身をもって気づくことができた。仁済大学の海外交流室長とスタッフの方々及び日本語学科長と諸先生、そして日本語学科の学生と日本人留学生の皆様に、心からの感謝と敬意を表します。

（丹羽 浩正）

参考文献

(3) 「日本経済新聞」2012年3月25日

※付記 本稿は「学校法人光星学院イノベーションプログラム（基金）」研究等補助金による研究成果である。